

第23回 作文コンテスト

今年で23回目となる今回は「美容師から世の中への提案」
というテーマで募集が行われました。
優秀賞に選ばれた、川畑 一弥様（鶴見支部）の作文をご紹介します。



優秀賞

美容師から世の中への提案

大阪府 川畑 一弥

いきなりですが、私は美容師として、やりたい事、叶えたい夢があります。それは『福祉美容・訪問美容』です。

何を普通の事を言っているのだと思う方もいるでしょう。この2つは、最近メディア等にも取り上げられる機会も増え、今さらそれが世の中への提案なのか？と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、私の言う『福祉美容・訪問美容』は、皆さんがおそらく想像しているものではありません。これに目を通してくださっている美容組合の方々にも、分からない方もいるかもしれません。

そう、私が言う『福祉美容・訪問美容』は、『医療ケア児と身体障害・発達障害（グレーゾーンを含む）のある子供とその家族』を対象としたものです。よくある高齢者・高齢者施設等への訪問ではありません。あくまで、0～18歳の子供のみになります。

そして、私の美容師としての世の中への提案は、その活動を国に認めてもらおうという事。私ひとりでは、難しい事なので、皆さんに協力して頂きたいという事になります。

そもそも、私がこの考えに至った経緯は、私自身が美容師である前に、子育て中の母親であり、私の大切な可愛い子供は、自閉症スペクトラムとADHDという発達障害があることから、仕事をしながら子育てをする中で「どうして、この世の中は、障害のある子供達に優しくしないのだろうか。理不尽な事が多すぎる」「大好きな美容師の仕事はどうだろうか？全然だ。障害のある子供やその親への配慮があまり出ていない」と感じた事から、自分の出来るところから、改善していきたいと思い、私の出来る事は、美容師としての活動だと思い至り『福祉美容・訪問美容』に行きつきました。

り回れる状態でなければならぬからだ」。

でも、その事を親は伝えないだろう。「貴方のせいよ」なんて言うわけない。

その事があった夜、私は考えました。私は、色々な人に笑顔になつて欲しくて、この仕事を選んだ。だけど「色々な人」の中に、今私の目の前の人達が入っているのか？いや、入っていないかった……。私の色々な人は、当たり前のように美容室に来れる人だけだった。子供を産むまで気付かなかった。気付かなかった。なんとかこの状況を早く変えたい!! と思い、すぐに行動に移すことにしたのです。

すぐさま、役所に行き「訪問美容をしたい」と伝えると、簡単に「どうぞ」と言われた。訪問費用を一部行政が負担するので、その度申請してと言われ「そんな制度あるんだ」助かるなと思った。でも話を進めるうちに、「無理です。貴方がしようとしている事は、認められないし、違法です」と言われ、私は、愕然としました。そう、訪問対象者は、高齢者施設、高齢の要介護者とその家族に、限定されていたからです。その理由は美容室に行くのが困難だから。でも、その理由なら子供達にも

活動するにあたり、色々な方の困り事を聞いて、主にどういった事をメインに活動するかを考えようと思いい、息子の療育の教室やデイスービスの先生、他の親御さんに話を聞きました。そうすると、美容室に行けない子がたくさんいる事、カットが出来ない子がいる事が分かりました。もちろん理由は様々です。長く座ってられない、じっとできない、ハサミが怖い、切られるのが怖い、小さな時に押さえつけられてカットされたのがトラウマ、あまり知らない場所や人が怖い。そして髪が切れない、さわれない事から、学校などでクラスの子から貶されたりする。残念な事に見た目を大事にする日本では、入試や、就職が難しい。たくさん困り事がありました。そして、話を聞いていく中で、お母さん達の髪も長く手入れされていない方が多い様に感じました。でもそれは、質問しなくても私にはよく分かりました。

事なのです。園や学校に行っている間に、子供がいない時にしか出来ない家事などをやらなくてはならないし、私で言うなら、その間、仕事なので髪をカットなんてしてもらえません。幸い私は、この仕事をしているので、それなりにキレイにしている様にカットしてなくても、染めていなくてもセットでごまかせます。それで、息子をお願いしているデイスービスに、お迎えに行った時、他の子供達からこんな事を言われました。「いいな、〇〇君のママはいつも、キレイで」。

「僕のママ、髪ボサボサやしキレイじゃないから、学校とか来て欲しくないねん。他のママは、キレイやしオシャレなのに」。

私は胸が痛くなりました。だって、そのお母さんが、ズボラではない事が分かるから。本当は〈定型児や健康児を育てるよりも、何倍も大変な子育てを、ほぼ、ひとりで担っているから。貴方という大切な命を守る為に毎日、必死で頑張っているから。オシャレなんて出来ない。暴れる貴方を抱きかかえないといけない、どこかに脱走してしまう貴方を追いかけないといけない、貴方がケガしないように、常になりふりかまわず走

当てはまるはずだと伝えると、返ってきた言葉にショックを受けました。「子供は、親が頑張つてつれていけばいい」。

「この人は何を言っているんだ」と思いました。それなら、高齢者だつて家族や介護者が頑張ればいいじゃないか。意味が分からない。でも、それを役所の人に言っても仕方ない。だって、国がそう決めているから。まさか、私がやろうとしていた事に、こんな大きな壁があるとは思わなかった。私は国と戦えるのか……、動けなくなつてしまった。それでも悔しくて、小さな活動や、色々調べたり、たまたま出会えた議員さんの協力もあり、分かった事が2つ。京都府や市条例で認められている。そもそも訪問等の決まりは、「老健」が定めたので、文字通り老人に對してだけの決まりで、そこに子供は含まれないので、違法ではなかった。だが全国の行政はこれの子供にまであてはめてしまっていただけだった。

私はここまで出来た。後は、この文章が全国の美容師、行政の長、厚生労働大臣に、届くことを願って、子供達の未来を願う文を終わります。